



ゼカリヤ システイーナ礼拝堂

ゼカリヤはミケランジェロによるシステイーナ礼拝堂天井画の7人の預言者の一人に描かれています。7人のうちでは、落ち着きはらって、冷静で、背後の天使もゼカリヤを支えているような穏やかさが感じられ、平常心で眺められる像です。ゼカリヤ書は一人の預言者の言葉ではなく、別の預言者の言葉も、まとめて記されているということです。1章から8章までが第一ゼカリヤとされています。私はこの前半に登場するゼカリヤが、幻を語るという点で大好きです。幻を見ることができ、幻について語る言葉がある、という姿勢はある意味では不可解な面もありますが、同時に、現実しか目に入らない人間にとっては、夢のような憧れがあります。

ゼカリヤはダレイオス王の治世、神殿建設が中断された頃に活躍した預言者です。ゼカリヤは民の心が萎えて、弱って、意気消沈していた時、ハガイと共に働き、「神に立ち帰れ」と語ったのです。「主はあなたたちの先祖に向かって激しく怒られた。あなたは彼らに言いなさい。万軍の主はこう言われる。わたしに立ち帰れ、と万軍の主は言われる。そうすれば、わたしもあなたたちのもとに／立ち帰る、と万軍の主は言われる。」(ゼカ1:2)ゼカリヤは神を想う時、様々な幻が示され、それは神の思いの象徴と感じられ、それを語らずにはいられませんでした。

1. 谷底のミルトスの林にたたく様々な毛色の馬たち…これは地上をくまなく巡回させる神の使い達であったが、民は「安らかに」暮らしていると答えています。「安らかに」は「服従して」という意味のようです。神はそれを憐れみ、恵みで溢れさせると言われるのです。

2. 4本の角と4人の鉄工…それはエジプト、アッシリア、バビロン、ペルシャなど、四方を囲み、イスラエルを虐げた強国であったが、それらを砕く者達が来るといいます。

3. 図り縄を持つ人間…都エルサレムを再建する者への言葉が告げられます。あの若者のもとに走り寄って告げよ。エルサレムは人と家畜に溢れ／城壁のない開かれた所となる。わたし自身が町を囲む火の城壁となると／主は言われる。わたしはその中において栄光となる。(ゼカ2:7)ゼカリヤは、城壁は不要である。なぜなら神自身が火の城壁として民を守られるという信仰を語っています。

4. 七つの目を持つ石…7つの大罪を戒める目としての律法を、碑文として刻みつけよ。律法によって、地の罪を取り除く働きをする者として、大祭司ヨシュアを選び、祝福し、祭司たちを選びます。

5. 七つのともし火皿を持つ金の燭台と2本のオリーブ…7つの光は神の目であり、希望の印である。それを灯し続ける働きをするのが、大祭司ヨシュアと総督ゼルバベルである。ゼルバベルにはこれがゼルバベルに向けられた主の言葉である。武力によらず、権力によらず／ただわが霊によって、と万軍の主は言われる。(ゼル4:6)とその統治を、武力、権力によるのではなく、主の御心によって行えと語ります。



6. 飛ぶ呪いの巻物…盗人、偽証人は神の呪いを受け、滅ぼされると警告しています。

7. エファ升に閉じ込められた女の追放…女は邪悪を体現しています。邪悪がさらに二人の女の翼によって運び去られます。邪悪を女に体現させている点で女性への偏見が感じられますが…

8. 馬に引かれる四つの戦車…神は天の四方から風に乗って、世界の隅々まで戦車を向かわせる。

ゼカリヤは神の激しい熱情は、バビロン捕囚から生き残った者を憐れみ、祝福すると語ります。しかし今、わたしはこの民の残りの者に対して…平和の種が蒔かれ、ぶどうの木は実を結び／大地は収穫をもたらし、天は露をください。わたしは、この民の残りの者に／これらすべてのものを受け継がせる。(ゼカ8:10)いまだに帰国できず、散らされているすべてのイスラエル人に「共におられる神」に立ち帰ろうと、美しい、強い幻を示しながら、語り続けたのです。